

新たな不登校を生まないために ～組織による取組の推進～

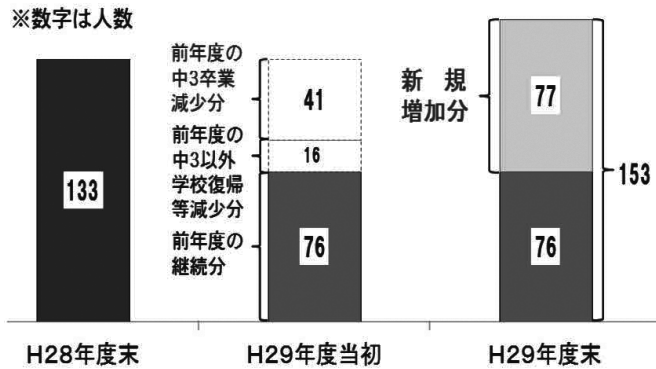
1 北管内の不登校児童生徒の状況から

右のグラフは、H28年度からH29年度までの問題行動等調査の結果を基に、北管内の不登校の継続数と新規数の状況を示したものです。H28年度末の時点で133名いた不登校児童生徒数は、卒業や学校復帰等により57名減少し、H29年度当初の不登校児童生徒数は76名になりました。

しかし、H29年度末には、減少分を上回る77名が新たに不登校になっています。この新規数を減らすことが不登校児童生徒数を減少させる重要なポイントになります。

新規の不登校児童生徒数を減らすためには「居場所づくりと絆づくりの取組」や、「日常の情報を即時対応に生かす取組」を組織的に行うことにより、不登校になってしまう状態を未然に防ぐことが大切になります。

H28年度～H29年度の問題行動等調査における不登校児童生徒数（北管内データ）



2 「居場所づくりと絆づくりの取組」について

「魅力ある学校づくり」を進めるために、「居場所づくり」と「絆づくり」の違いを理解し、学校生活の大半を占める授業時間や、行事等を含めた教育活動全体を通じて意図的に取り組む必要があります。

「魅力ある学校づくり」に向けて

全ての児童生徒を対象に組織で意図的・計画的に「居場所づくり」と「絆づくり」の取組を実施します。そして定期的に、日常の取組が本当に児童生徒の心に届いているのか、教師の見取りと児童生徒の思いとの間にずれはないのかなどを質問紙等により検証します。検証した結果に応じて、PDCAサイクルを機能させながら取組の見直しを行い、教師間の対応のずれも修正します。

未然防止のための「魅力ある学校づくり」

教職員が児童生徒の「居場所づくり」を進めることにより

児童生徒一人一人が安心して学校生活を送ることができ、自尊感情を高めたり充実感を得たりすることが期待できます。

児童生徒が主体的に取り組む活動を通して「絆づくり」を進めることにより

児童生徒同士の多様な関わりの中で自己有用感や社会性が育まれ、仲間を支援できるよりよい集団に成長することが期待できます。

児童生徒が所属している集団に、個々の児童生徒に対して自己存在感や自己有用感を感じさせることができる雰囲気があれば、不登校やいじめを未然に防止することが可能になります。また、次の二つの相互作用によって集団の結び付きは一層強くなります。

「集団が個人を集団の一員として組み込んでいこうとすること」

「個人が集団への愛着やつながりを感ずること」

できなかった部分に着目する集団ではなく、できたことを認める集団づくり、今あるその児童生徒の存在そのものを肯定し、そこからどう伸びていこうとしているのかに着目する集団づくりを全教職員が日々の学校生活の中で意識して取り組んでいくことが重要です。

3 「日常の情報を即時対応に生かす取組」について

新たな不登校を生まないために、不登校につながる可能性のある日常生活の些細なことに対して、組織で関わる必要があります。特に、初期段階で早期発見し情報を共有し、教職員が同僚性を発揮しながら組織で対応することができれば、不登校の未然防止に大きな効果が期待できます。

日常生活の中で「あれ？」と感じる様々な気付きを「ほんの些細なこと」、「まあいいか」、「また後で」などと判断してしまい、不登校につながりかねない重要な情報を自分の中でとどめてしまうことはないでしょうか。児童生徒の様子について少しでも気になることがあったら、その情報を個人で抱え込むことなく、児童生徒のために声や文字に表し、組織での早期発見・即時対応に生かしていくことがとても重要です。

「あれ？」と感じた先生たちの気付きをすぐ行動に移す。

その場で適切な声掛け、聴き取り及び指導等を行い、関係職員にできるだけ早く伝える。

組織で情報を共有し対応を検討する。その際すぐに集まり、短時間でも対応を検討する場合もある。

組織で方向性を確認し、即時対応する。

口頭や付せん紙等で情報を伝えた上で、パソコンの共有フォルダ内の名簿等に簡潔に入力し、定期的に状況を確認する仕組みをつくることも大切です。その際、記載が多い児童生徒には特に適切な支援が求められます。

生徒指導に関わらず、職員室内での教師同士の会話、日常的な情報交換は大切です。教師自身の悩みの相談も含めて「話せる雰囲気」や「助け合える雰囲気」をつくりだす職員の間同僚性がとても大切です。